

# 社会地理学と自明視されている世界

デイヴィッド・レイ  
(長尾謙吉 訳)

David LEY

Social geography and the taken-for-granted world

*Transactions. Institute of British Geographers. New Series. 2, 1977, 498-512.*

© 1996 by Royal Geographical Society

摘要：本稿では、社会地理学における最近の論評において明確な理論的方向性と適切な哲学的基盤の双方が欠けている点について論じる。取り上げるのは、地図を乗り越えて社会的認知的諸過程へと視野を広げた分析のなかでは、研究者は客観性に主観性が交わった世界へと足を踏み入れているということである。ヴィダリアン Vidalian の地理学、パーク Park の都市社会学、行動地理学、これらはすべて人間の社会地理学に向けた有望な先行研究であるけれども、ある程度よろめいている。なぜなら、それら先行研究は主観性に関する特有の認識論的諸問題に取り組むための適切な哲学的基盤を引き出すことに失敗しているからである。それらは主観性の場所を拒絶した伝統に没頭しているか、そうでなければ、その人間の焦点は仮説—検証型の柔軟でない科学主義のなかに失われてしまっている。地図の背後を探求する社会地理学は、主観性を避けて通ることができない。なぜなら、集団的行為や意志決定の苗床である日常経験の自明視されている世界では、あらゆる客体がつねに主体にとつての客体であるからである。現象学は、事実と価値が必然的にかみ合った日常世界を関心の中心として取り上げる哲学である。現象学者のアルフレッド・シュッツ Alfred Schutz の社会的行為に関する理論は、場所に意味を与え集団と組織の双方の意志決定を左右する社会的認知的諸過程に関心を置く、一つの社会地理学のため適切な基盤として提示される。

人文地理学の間人化 (マクシミリアン・ソール Max. Sorre)

それゆえ、人間に関して私たちが知ることができる最も重要なことは自明視していることであり、社会に関する最も基本的かつ重要な事実のはめつたに議論されず一般に決着済みとみなされることである。(ルイス・ワース Louis Wirth)

## 現在の袋小路

最近の社会地理学に対する関心の増大は、この分野に潜んでいるあいまいさの問題を再び提起している。経験的研究の増大にもかかわらず、考え抜かれた理論の支柱がなく、また哲学的基盤に関する明瞭な議論もない。より顕著になっていることは、空間形態と社会過程の相関的役割に関するまったくあいまいなごまかしである。ここ 10 年ほどの間の展望論文は、地図は手始めとなるだろうが究極的な言葉とはならないという考え方にますます傾きつつある<sup>1</sup>。けれども過程の研究に向けた確かな道のりは明瞭に議論されておらず、

現在の研究でさえも社会過程よりも空間的事実の「はかない構造 frail structure」<sup>2</sup>に心を奪われているかのようである。パール Pahl による包括的な社会地理学の定義である「・・・空間的舞台のなかで社会的に規定された住民の理解に関わっている過程とパターン」<sup>3</sup>は、現実というよりむしろ信念の宣言のままである。より適切にはバットィマー Buttmer によるさらにはっきりとしない「・・・人間の空間組織に関する多面的な観点」<sup>4</sup>という言及がある。

本稿では、現代の社会地理学において断面とした方向性が欠けていることは空間形態と社会過程の間の根本的な区別立てに基づいていることを論じる。そうし

た着想は、それ自体が、事実を価値から、客体を主体から、自然科学を社会科学から、分かつ哲学的分割と正反対の側面にあることがわかるであろう。断固とした的確な哲学的基盤を確立することによってのみ、社会地理学が空間的事象の前提となっている社会過程にまで関心を首尾よく広げていき、それを乗り越えて限定された一般化や究極的理論の展開にまでうまく結び付けていくことになる。地理学の歴史を振り返れば人間の社会地理学が誤って花を咲かしていたいくつかの教訓的な事例がある。その誤りは、これから論じていくのであるが、この学科の客体に関する伝統的偏向とあらゆる客体は主体のとつての客体である日常経験の教えを無視していることによる。過去のこうした教訓は、認識論的袋小路に再びさまよっている現在に有用な教訓を提示し、現象学の哲学の中でなしうる解決に貢献する。その哲学では客体と主体をわれわれの素朴な経験の領域では共有する統一体と再び考えており、その領域は、これから取り上げていくが、人間の社会地理学に向けた主題と中心的関心を形成しているのである<sup>5</sup>。

### 過去からの教訓

ポール・ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュ Paul Vidal de la Blache によって築かれた人文地理学の学派は、景観的事象に横たわっている関係や過程に関心を払う社会地理学の今日的展開の先駆者であると言われている。生活様式 *genre de vie* と環境 *milieu* という彼の2つの概念は社会集団と環境の間の相互関係を探求するための基盤であったし、彼の可能論的立場は景観が選択決定を下す社会集団の産物であることを認めていた。個々の地域や個々の場所は、主体をともなった客体として、環境と意志決定を下す人間との密接な融合物として全体論的に考えられてきた。人間は根づいており、人間は「環境にしみこんでいる」<sup>6</sup>。けれども、人間と似通ったメダルの鑄型であるという景観についてのヴィダルの有名な記述にあるように、弁証法は継続して強調されていた。こうした関係のなかでは、独立した現象というもののがほとんどない。つまり、個々の特徴は、それにとどまることなくに全体の他の部分を語るものなのである。このような研究を行ってゆく中で、自然科学の方法の適切さや人間行動の一般法則の展開可能性に懐疑的であった。この点で彼はウ

ェーバー Weber によって考えられていた積み重ねによる中位的な一般化の立場に近く、ウェーバーの解釈社会学は人間の科学に現象学的視点を導入する重要な架け橋としての役目を果たしている。

ヴィダル流のシステムの経過は、教訓的な方法論的転換をあらわにする。それはデュルケイム Durkheim や他の社会学者によって導かれた社会形態学の新しい分野から、しばしば厳しく批判のもとにあった<sup>7</sup>。この対立には、哲学的底流が潜んでいた。デュルケイミアンの方法は、現象の別個のまとまりと法則の骨格を組み込んだ個々の科学の定義を主張する自然科学の実証主義的モデルの多くを取り入れていた。これは、場所という視点をより強調したヴィダイアンの見方や、一方では可能性と実現性を指摘しながらも決定的叙述を強いらなかった関係を明らかにすることは対峙しているのである<sup>8</sup>。

しかしより強烈な風当たりは、フランス学派自体の強調点の漸進的な移行から生じてきた。関心は、場所の解釈的な叙述から、ジャン・ブリュヌヌ Jean Brunhes や他の人々の仕事のなかで景観的事象のより形式的なカテゴリー化へと移っていった<sup>9</sup>。これらの景観的事象はカテゴリー化され、その文脈からは切り放された。その結果、景観的事象は機能主義の客観的意味しか表現しなかった。ヴィダルのバランスのとれたヒューマニズムは、ドゥマンジョン Demangeon の農村集落の計量的コード化で最高潮に達し<sup>10</sup>、北米ではカール・サウアー Carl Sauer の景観学派の諸側面に代表される<sup>11</sup>、勢いを増しつつあった物質主義的指向へととつてかわられた。物質的事象はその日常人間世界からとかれて生じてきた。つまり、人工物は態度にとつてかわり、土地利用形態は地域の個性を討ちまかした。場所における人間の科学から現象の科学への移行は、場所を空間の幾何へと究極的に抽象化し、人間を色つやのない企業主義的な姿へと還元した、科学主義に向けた道筋を用意した。ウェーバーの解釈社会学とは異なり、ヴィダルの解釈的人文地理学は認識論的哲学的問題には取り組まなかった。結果的に、特異性や理論なき内容や方法という「実証主義」科学の致命に従順する後の世代による批判に対抗するだけの確かな基盤を見いだせなかった。しかしながら、これらの批判は、現象学によって提示されたような主体と客体を包含する哲学の基盤から社会学のなかにもあるように、地理学のなかでも出会うことができる。

農村フランス学派から都市シカゴ学派に目を転じると、教訓的な展開の類似点がいくつかみられる。パークの都市社会学とヴィダルの人文地理学的方法論的共通点は重なりあっており、あまりにも短絡的な都市におけるヴィダリアンシステムの却下を打ち消すものである。パークは彼の初期の著作に引用しているフランス人文地理学に確かに精通していた。ヴィダルのように、パークは人間—環境関係を相互的なものとみなしていた。環境の刺激を与える影響は無視されなかったけれども<sup>12</sup>、土地利用単位はそれが「その住民の独特の感情と必然的に染みついている時」<sup>13</sup>のみ近隣となった。そのフレーズは追憶のヴィダルが残した景観の人文主義的定義である。自然発生的地域 *natural area* は地域 *region* と同等であり、社会的世界 *social world* は、与えられた設定における局地化した人間、態度、行動である生活様式と類似している。パークの見方は、フランス学派のように全体論的であり、自然都市地域 *natural urban area* の地域誌を強調し、積み重ねによってのみ一般化が可能となる統合的帰納的アプローチであった。地域誌は、都市住民の日常経験世界、道徳的秩序 *moral order*、「居住地や実際に生活している諸条件のもとでの人間」<sup>14</sup>に、人間の態度、主観的経験、環境との関係での自己の概念化を編み込みながら関心を寄せてきた<sup>15</sup>。創造者としての人間や人間の意志決定の役割は、農村フランスのようにシカゴ都市研究でも顕著にみられる。と言うのも、都市は「本来の性質のとりわけ人間の本性の生産物」<sup>16</sup>以外の何ものであろうか？という点からわかる。人文主義的なモチーフはこれらの言及の中で明らかであり、パークやシカゴ学派という現象学の潮流にかなり近い考えをもった北米の研究者へのデューイ *Dewey* やミード *Mead* の影響を留意しておくことは重要である。

こうした文脈では、シカゴ学派が狭量な経済決定論で社会的文化的変数を軽視していると批判された1940年代の議論は不適当であるように思われる<sup>17</sup>。しかしながら、フランス学派が物質的機能主義の時期へと移っていたのと同様に、シカゴ社会学は、社会集団と土地利用が都市の経済的勾配によって空間的に配分される生物学的隠喩 *biological metaphor* がかなり染み込んだ空間関係の科学である人間生態学 *human ecology* に占有されていった<sup>18</sup>。強調点のこうした変化は、理論的位置に関わるパークの初期の言及からの方法論的な転換の余地を与えた。

全ての社会関係を空間関係に還元せよ。そして、それが人間関係に自然科学の基礎的論理を適用することを可能にする<sup>19</sup>。

こうした風潮でのシカゴ学派への地理的対峙は啓発的である。地域誌が無視される一方で、物質的現象と経済関係を強調した人間生態学は地理学の枠内からすばやくもめられた。その強調は、今日の著作でも続いている。Barrows は、1923年の著作の中で、「この学問の他の大部分の領域においても経済地理に基づかなければならない」と述べ、一方、社会地理の題材の多くは「つかみどころのない・・・関係のこうした本体は地理学にとって確実性のあるものというよりも潜在的な分野を形成するように思われる。」<sup>20</sup>と述べている。

よく似た潮流が初期のフランス学派と初期のシカゴ学派の両者を共通した当初の方法論的目標から転換させた。おのおのの例でも、主体と客体を統合している全体論的な人文主義的見地は、自然科学的伝統を引きずり決定論的思考方を奨励する唯物論的な論じ方と妥協させられた<sup>21</sup>。社会関係は空間的事象の関心に押し込められ、社会地理学は人間の物質的活動と地図のいやおうない客観性に占有されるようになった。1960年になってはじめて、都市土地利用における社会的文化的変数の役割に関するフィレイ *Pirey* の勧告が地理学の文献に広範に公示された<sup>22</sup>。経済的物質主義を強調する学問的風潮のまに、社会地理学は空間的事象の客観的記述を社会集団の生活世界におけるそうした事実の意味に同等に関心を置いていた人文地理学に代わって用いるようになった。

## 行動地理学の教訓

一見して近年においてバランスはとれているように思われる。ヴィダルの人文主義は、客観的構成要素だけでなく主観的構成要素を伴ったマクシミアン・ソールによる社会空間という着想の展開によってよみがえらされた<sup>23</sup>。知覚に関する将来性ある経験的研究は、全体論的ミクロスケールの設定をしばしば強調しており、環境との相互作用における人間の価値と創造性の役割の再評価を約束するものであった<sup>24</sup>。しかしながら、とりわけ行動地理学の出現は日常生活の文脈にお

ける社会的認知的諸過程の調査の分布図や空間的事象の背後への掘り下げへの明瞭な傾倒の証左となった。「…行動アプローチは位置間それ自体のトポロジカルな関係に関心をむけるよりも位置を決める意志過程を強調する。」<sup>25</sup>

しかしながら、行動地理学の核心には方法論的両義性があり、それは主体と客体の二分法、認知過程と空間形態の二元論、という他の例にも表れている。一方には、集団や個人の行動を誘発する動機や社会的過程よりも空間関係の幾何学には関心が薄いという認識がある。他の見地からは、認知変数は「規範的あるいは推測的立地論によって扱うことができない出来事の『残差』領域」<sup>26</sup>である個人的例外として取り入れるだけでマクロスケールのパターンとしての空間的幾何学の科学に関心を寄せている。

立地論の見地は、『地理学における説明』の中で明晰的に述べられている親密な方法論的取りまきをもっている<sup>27</sup>。その基盤は実証主義であり、そのモデルは自然科学のものであり、個々の学問分野に特有の一連の現象、正確に定められた概念、高いレベルの測定、理論と絶対的一般法則の形成、に関心がある。地理学では、集合体の属性、マクロな空間構造、経済的勾配に確実に従う人間の青白い幽霊と結びついた暗示的経済決定論と関係している。そうした方法で、より洗練された衣裝をまとい粗野な生物学的アナロジーから離れているにもかかわらず、立地論学派は人間生態学と無関係ではない。マッケンジー Mackenzie による「空間生態学は人間と人間組織の共生的関係の空間的側面を扱う」<sup>28</sup>という人間生態学の定義は空間学派の好みのかなりをとらえている。相互の結びつきは、人間生態学は空間ほど地理を強調することを捜し求めない、なぜなら今や地理は空間の幾何学のマントをそれ自体でもとめているからである、というパークの叙述でより十分に強調されている<sup>29</sup>。

他の社会科学において起こっているように、こうした方法論的一群こそが地理学の行動アプローチに浸透してきた<sup>30</sup>。けれども認知を扱うさいの実証主義の当惑は明らかであり、「認知—行動理論を展開していくよりも経済理論や確率論を展開するほうがすばやくさらに前進できるのではないだろうか」<sup>31</sup>という結論を導きだしてしまう。この結論のパローによる半世紀前のものとの特徴的な類似点は、社会的認知的過程の調査にあまり適していない共通した認識論的基盤に関す

る重要な言及である。実証主義者にとって、主観は形而上のものであり、それゆえ知ることでできない、非合理的あるいは個人的なものであり、理論の範囲を越えたものとみなされてきた。代わりに、精神世界は、フッサール Husserl によって異議申し立てられた、自然科学を模倣して経験の意味にとって不可欠な状況的側面を破壊した、心理学の一種によって還元されてきた。「精神的な領域では、部分から全体を理解することはできない。」<sup>32</sup>

行動地理学は心理学モデルの後遺いをする傾向にあり、この理由からこそオルソンはこの分野を死産であると述べた。空間的事象から社会過程への移行の中で、重要なところは、事実と物質現象の客観的世界がアイデアと価値の主観的世界と混じり合っているように交錯しており、前者を議論するための論理的言語は後者を覆うのに必ずしも必要ではないということである。「意図、希望、恐怖の傾いた領域では、つねに $2 \times 2 = 4$ とはかぎらない」<sup>33</sup>。実証主義者の見地が暗に示している決定論的(確率的)関係は、「合理的」行為が無数の主観的影響によって曇らされたところで、ぼやけたあいまいで変わりやすい関係によってより適切に特徴づけられている人間行動の世界に対して相容れない正確さを示唆している。こうした影響は、センサスや大量サーベイにある一群のタイプの変数によって明らかにされることはめったにない。こうした変数は科学的分析には便利であるけれども、人間の意志決定にとってはめったに目立つことがない。社会過程を理解するためには、意志決定者の状況に出会わなければならない、それは不十分で不一致な情報・価値・同志行動・短期的動機・長期的信念を含んでいるのである。

## 現象学的伝統

これまでの議論は2つの方法論的立場を分離してきた。一方は全体論、人間と環境との弁証法、社会的認知的変数の編入、に関心をもっており、他方は物質現象、明示的な還元主義と暗示的な決定論、事実から価値を分離するアプローチ、に傾倒しているものである。おのおの例においても、人文地理学には、前者の道筋よりも後者のそれを追求する傾向がある。その結果、ヴィタリアの地理学・シカゴ社会学・行動地理学のような当初は人間を中心とした分野でさえも、自然科学の不適切な形式のほうへ展開してきている<sup>34</sup>。

これら2つの立場の間の論争は、より広範な認識論的文脈のなかに引きつけていくべきである。ラッツェル Ratzel の暗示的な物質主義や決定論を矯正するものとしてのヴィダリアン学派の出現は、19世紀末期の科学主義に対する広範な抵抗の局所的な事例である。デュルタイ Delthey による歴史意識の強調・ウェーバーによる理解 Verstehen の方法論・マンハイム Mannheim による知識社会学はすべて、客体から主体を分かち、行動やさらに生活からさえも人間の文脈をはぎとる極端な実証主義に対する反動である。北米では、デューイ、クーリー-Cooley、ミードに代表される第二のより大きく独立した学派が、同様に刺激-反応という行動主義の拘束に対して反旗をひるがえし、人間の相互作用の本質的な意味の豊かさに関心をあてたシンボリック相互作用主義 symbolic interactionism として後に知られるようになるものを確立した。これらの著者の間には強調点の差異がしばしば見受けられるけれども、その立場は、派生でないとしても、現象学の確立者であり同じ時代をいきたエドモンド・フッサールによく似ている。

19世紀後半における近代人の世界観は実証主義科学によって決定されていた。これは本当の人間性にとって決定的な問題からの転回を意味した……たんに事実に基づく知識のみが事実に基づく人間に寄与した……わたしたちの死物狂いの難局では、この科学は私たちに何も語るものがないのである<sup>36</sup>。

メルロー＝ポンティ Merleau-Ponty やアルフレッド・シュッツを含む第2世代の現象学者達は、一方で現象学的伝統を統合しながら実証主義の根本的批判を主張してきた。例えば、シュッツはウェーバーとフッサールの構渡しを首尾良く築き、そうしてウェーバーの解釈社会学に断固とした哲学的基盤を確立した<sup>37</sup>。

現象学がラディカルな抵抗として始まるなら、「ものそれ自体にもどれ back to the things themselves」というその主張は、主体と客体との間の関係についての建設的再構築である。行為は意図があるものとみなされ、その主体から切り離されたときには意味がないものとみなされる。このように現象学は全体論的哲学である。「世界はすべて私たちのなかにある。そして私は私自身のほかすべてである」<sup>38</sup>。メルロー＝ポンティとシュッツは人間関係や世界との出会いの卓越の主張で顕著であった。彼らより以前に、マンハイムは

知の関係の本質、歴史的時代へのその「実存的関係性 existential relatively」を強調していた。客体と概念双方の関係の本質を指摘したシュッツによる多元的現実という概念のように、知を含むあらゆる客体は主体にとっての客体である<sup>39</sup>。そこでは、すべての現象学的伝統において意味の問題は中心的関心事となる。なぜなら、意味と知覚は客体との出会いのなかで存在と主体を語るからである。

この現象学のテーマのいくつかに関する要約的な記述は、哲学の文脈の中に社会地理学の議論を位置づけるためのものである。全体論、人間と環境および主体と客体の相互性、へのヴィダリアンの傾倒は、デュルケイムの実証主義とは食い違わうとした哲学的潮流と重なっていた。調査様式としての共鳴的理解、人間の創造的役割、生産物としての人工物の活用、ある歴史時代の地表面であるマンハイムの世界観 Weltanschauung と空間的に等価なものである場所の真性や個性への関心は、すべて現象学的調査を共有したヴィダリアンの地理学の特徴である。これらの特徴は、同じく初期のシカゴ学派へもあてはまり、この学派では哲学的影響がより直接的である。なぜなら、パークとカレの同僚はデューイやミードの仕事と密接な接点があったからである。

しかし現在はどうだろうか？現象学的潮流は、景観効果として最高潮に達する集団的行為に関心をよせる再活性化した社会地理学へ基盤を提供し続けているであろうか。行動地理学における実証主義の欠点は示唆的である。現象学的オルタナティブは何であろうか。

## 社会的行為としての社会科学

フッサールによって始まった時から、現象学の第一の仕事は、代わる代わるの哲学の根源的想定の変面を剥くことである。根源的批判は、現象学の一つの方法とよくみなされてきた<sup>40</sup>。こうした様式では、経験科学の根源のところ、我々自身の私生活世界でおこるように同じ主体的素朴さという、なくてはならない自明視されている想定がある。経験的に主観性の役割を拒絶する科学の根源のところでの主観性の再評価は、素朴な経験にあるように主体と客体が再結合する建設的統合への道を提供する。したがって、社会科学における現象学的考察は、前提の分析から、つまり自覚せずに自明とされる想定暴露からはじまるであろう。

生活においてと同様に科学において、客体への主観的基盤は、個人もしくは集団が未知のものに出会い、自身の現実の定義を投影する情報の空白地帯へ入った環境において最も目に見えてくる<sup>40</sup>。1つの教訓的な事例は、18・19世紀の多くの科学的探検隊に特有の地理的に誤った解釈である。例えとしては南方大陸への調査があり、それは自分達のあいまいでないメンタルイメージが明確になる以前に自然環境の中にあいまいな手がかりをみだした太平洋探検隊として数世紀にわたり永続した知的神話である。例えば、地平線上の低い雲は続く地表面の縁であると解釈され、海鳥や浮動している草木の存在は大陸が近いことの指標とみなされ、群島は最北の岬と沖合の島々と知覚された。探検行動は、事実と価値、客体と主体、の融合物となった。同時代の人々にとって、南方大陸のイメージは特異なものでもなければ風変わりなものでもない。つまり、それは社会的に構築された現実であり、知的かつ科学的認可によって是認され保持されたのである。

こうした過程は、昨今の知的探検においても消え去っていない。例えばブラック・アメリカについての変わることのない社会科学のイメージを考えてみよう。知的探検者による彼ら自身の概念的正確実性を整理する試みは、特色として二次的資料の活用とは隔たりがあるということがある。著作してきたのがいつの時代であろうとも、社会学者は黒人運動のその時代での新たな結合を主張してきた。1920年にカーリン Kerlin は、彼が言うところの新黒人運動 New Negro Movement について言及したし、デトワイラー Detweiler は高揚するナショナリズムの多くの事例をあげていた<sup>41</sup>。アーノルド・ローズとカロライン・ローズ Arnold and Caroline Rose は、1930年代と1940年代を通じて増大した黒人志気を概観した。それは彼らが著作した時である、「今やアメリカにおけるニグロライフの力強い力」<sup>42</sup>の時であった。1953年にピークを迎えたと彼らは見なした。5年後、ジョンソン Johnson は、「ぐらつくことのない人種のプライド unwavering race pride」の「新黒人信条 New Negro Creed」を明確にすることを主張した<sup>43</sup>。それから5年後、ウィリアムズ Williams は新発見の「新黒人規約 The New Negro Code」の誕生を主張した<sup>44</sup>。にもかかわらずその5年後には、「ゲッターの人々は過去のニグロとは行為や感情の点で大きく異なる…」<sup>45</sup>「新ゲッター人 New Ghetto Man」が作り出された<sup>46</sup>。

新黒人運動、新黒人信条、新黒人規約、新ゲッター人…それぞれの時代に、社会学者は、彼らが著作していた時に新たな動く語力が働いていたと主張して、黒人コミュニティに組織を押しつけた。だれも起こっていたことがその時代のブラック・アメリカの新たな目覚めではないことを認識していなかった。むしろそれは社会科学が固執しているイメージの周期的な強化と不朽化であった。社会的に認可されたイメージこそ、高度に組織され保持された明かな目的論であり、ブラック・アメリカではない。もし結合の本当の語力が少なくとも50年間も活発であれば、黒人の居住するインナーシティ（都心周辺部）近隣におけるより知覚力のある参与観察研究によって明らかにされた無秩序を説明することは困難である。社会学者は、カオスの中で秩序を自ら探求してゆく上で、黒人コミュニティに好まれずに考案された概念的構造を押しつけた。科学的行為は、その時自ら置き間違えたイメージの表示灯を追っていった。

こうした見方からこそ、黒人社会学者のビルングスレイ Billingsley は「アメリカ人社会学者は社会的と言うよりアメリカ的であり科学的と言うより社会的である」<sup>47</sup>と論評する。主観的な集団内での価値は客観的分析にまで浸透している。実際、研究者の認知カテゴリーについて研究者が調査している「事実」と同じくらい、われわれは学んでいる。行動の「ア・プリオリな「外側からの見方」は、観察者の社会的価値を映し出した鏡として働いている。客体の背後には、それを選択し名付け分類し解釈しあるいは退けた心である主体がある。そうした偏向の点検は、もちろん、共通経験の検査に対して科学的理論を呼び戻すもことである。しかし日常世界が客観的観察者によって遙か遠方からのみ知覚され、その織物が簡単に引き出せる便利な変数による二次的な資料によって定義されるとき、検査はしばしば完璧とはほど遠く、南方大陸の「発見」はあまりにも簡単に起こってしまうのである。

社会科学においては、技術の問題も概念の問題も社会的空白において認可されてはいない。われわれが現在それらに対してよそもとなっているように、これはまったく1960年代の地理学における方法論的熱狂の一部でわれわれがみてきたものではないのだろうか？革新的な技術の拡散は、日常世界における実際の適用と同程度に集団内の支持された事項である<sup>48</sup>。あるいは、輸送コストの分離と距離極小化によって特

徴づけられた行動を伴った空間理論を考えてみよう。なぜこれらなのか？人が、家や職場の選定に、服を買う場合に、最も気にかけていることは距離の克服であろうか？あるいは、それは相互に付きそっている社会科学者の集団の集約的心上のもとで社会的に強調された変数なのであろうか？\*おそらくそこには自然科学の説明モデルを追いかける地理学者のよく引用される格言「われわれの理論によって私たちを知るであろう。」\*\*で認識しているよりも、より根深い皮肉な結果があろう。

### 間主観的生活世界

行為の最も注意深い客体——科学的なところ——においてさえ、主体の強力な影響を無視することはできない。地理学的に「普通に考える」、つまり科学的方法の自明視されている基礎的要素は、間主観的な社会的対話の環境のなかでの事実と価値との十分な相互作用を明らかにする。社会地理学がそのアジェンダを追い空間的事象と地図の不明瞭でない客観性の背後にあるものを探るように、社会地理学は意味がありしばしばあいまいさが吹き込まれている出来事・関係・場所という同集団中心の世界に出会う。フッサールは、こうした領域を、後年の著作の中で、生活世界 *life-world* として特徴づけた。シュッツやメルロー＝ポンティのようなより最近の哲学者たちは、平凡な経験を取り巻いているこうした現実を研究するのに不合理でも不可能でもないことを力説している。しかし、彼らが議論しているように、物事自体の完全なまとまりを乱す不適切な方法でもって研究を行うべきではない。現象学的方法は、生活世界を理解するための論理を提供する。その基本的な問題は、「この社会的世界はこの世界において観察された行為者に何を意味し、彼はそこで行為することによって何を意味していたのか？」\*\*となる。行為は意図があつて目的のあるものであり、それらには意味がある。しかし、この意味への接近には、行為者の動機や知覚、つまりその人の状況の定義についての知識が必要となる\*\*。

意味は全てが個人的なものということとはめったになく、仲間集団の行為のなかで変わらずに共有され強化されている。経済合理主義者や人間の実存主義的観念の人気のない荒地とは違って、現象学的人間は非公然と社会的である。人間の生活世界は、共有された意

味や対面接触 *face to face* のわれわれ関係 *we-relations* にもとにたずさわっている仲間 *fellow men* との間主観的な世界である。これらの関係は、選択と表示によって、純粋な形態では、同じ考え方を持っている個人やともに群がっている鳥の間の選択的相互作用のよく知られたパターンによって結ばれている\*\*。社会集団は、その意志決定においてはもちろん自発的ではなく、程度は様々だが全体としての社会によって影響を受けている。ある人間にとっては、マクロな社会構造は行為の広範な広がり余地をなくす。アメリカのインナーシティの一人の落書き芸術家が書き記しているように、

何をするのかあまり選択がない・・・そうしたのは他にやることがなかったからだ。ギャングには関わりたくなかったし薬にも手をつけたくなかった、だからバスに落書きを始めた。それでマジックマーカーを持って事を始めたんだ\*\*。

おのおの個人は、その生活世界なかで制約となる歴史と地理をもっている。それゆえ、創造性と決定論・カリスマと組織との間の弁証法が始まる。地理学者にとっての弁証法は、人間と場所との間のものとなる。

第2に、より束縛のあることだが、日常生活の行為を制約するまともよりは個人や集団の生活世界に内的な諸力である。集団形成の過程において、人間が引き継いで集団内に「取り込まれて」いくにつれて、世界のその集団的見方は個人のことを語るものとなる。それゆえ同じく人間の行為は、集団的規範とますます共鳴するようになる。極端な場合に、共通の現実、繰り返される相互作用や共有されている課業によって定められ、現実社会的に規定されるようになり自明視されている規範を共有していない外部者にとって全く奇異に映る\*\*。現象学的人間モデルは、集団中心的な現実をもった生活世界の一つである。

経験の芸術的な反映は、常に生活世界のポートレートに生命を吹き込む。

この海のみちは私の世界であった。外は、一風変わったウェールズであり、石炭のくぼみ、山、川の流れ、私の知る限りでは、聖歌隊、フットボールチーム、羊、お伽話の高帽 *storybook tall hat*、赤のフランネルのコート *red flannel petticoats* に満ちている、私とは関係のないそうした事柄が動き回っていた。

暗黒のなかでのベルの響きのような野蠻な名前や動物の皮をまといおそらくいつも歌を口ずさんでいる山男という未知のウェールズを飛び越えると、イングランドがある。そこはロンドンであり、フロントと呼ばれる国である。そこから私たちの近隣の人々の多くは再び二度と帰ってこない。その国は、若い男のみが旅だっていくところである<sup>90</sup>。

デュラン・トーマス Dylan Thomas のポートレートはとりわけ空間的なものであるが、生活世界の輪郭は社会的時間的特徴を有している。その中核には、日常経験の、われわれ関係の問題とならず問題とされない世界がある。越えているのは、間接的な伝達と彼ら関係 *they-relationships* の世界、親友ではなく同時代の人々の世界である。私の知らない私の同時代の人々たち、彼らは典型化され、典型としてしかみない。例えば、郵便局員は私の郵便物を扱う人間としてしか知らない。イングランドをロンドンを典型として、フロントの向こうの世界として、戦争期における子供世界の南ウェールズとヨーロッパ大陸との間の突出した交差点としてしか取り上げないように。郵便局員が仲間との生活世界でも暮らしているにも関わらず、またイングランドはロンドンという典型以上のものであるが、現在、私の自明視された環境では、それらの事柄は私に何も関係しない<sup>91</sup>。

デュラン・トーマスは、また情報分野の不完全な性質の限界を示している。経済人とは異なり、社会的人間は極端に偏在した情報源を持っている。より知っており確実な主観的知識の中核部によって情報地図は特徴づけられており、そこでは知識がだんだん客体や典型となる領域で引き離れ最終的には無視の領域へと移行する<sup>92</sup>。この情報地図は行為と密接に結びついている。なぜなら知識のストックは本質的に起源からして実用的であり生活世界の頓発する状況を征服しながら得られていくからである。標準的な手続き、あるいはレシベ、はより繰り返されるあるいはルーティン的な事柄を扱うことに工夫されている。生活世界での知識は不完全となるだけでなく矛盾にもなりうる。情報の一致性と確実性は、一人の個人にとってさえも決して当然と考えられているわけではない。なぜなら、社会的役割が変化するにつれ、知識の有意性と解釈の双方は移り変わるかもしれないからである。

間主観的な生活世界というシュッツのモデルは、インフォーマルな集団から組織にまで有用に活用するこ

とが可能である。最近の分析は、組織が非個人的に人間を監督する様式を強調しているが、組織はより見えにくい内部環境、行為や意志決定の苗床である自明視される生活世界、もまた保持している。「組織的世界の客観性は、それがどれだけ個人的と強くみえようとも、人間的につくりだされ構築された客観性である。」<sup>93</sup>

企業のエconomicモデルは、合理的人間の人気のない姿ほどの不完全なものである。組織的事実から組織的決定の意味へ分析が移行していくと同時に、分析者は同様に不明瞭な間主観的世界へと足を踏み入れていく<sup>94</sup>。

組織的な世界における決定はまた、外部環境と内部環境の双方によって色づけられている。組織は、目標・優先事項・戦略の伝統を確立し、これらすべては、企業的な価値群、つまり意志決定に影響を与える風土を明らかにする。企業行動は、過去の結びつきや親密なネットワークがルーティン化した問題解決の中で活性化されるように、こうした風土の社会的偏向を写し出す<sup>95</sup>。共通した世界観は、間主観的なわれわれ関係を通して形成される。しかしながら、同じ組織の様々な部門間でさえも隔離は異なった価値が生き残る余地を残す<sup>96</sup>。

知覚は組織行動を理解する中心的事項である。「おそらく知覚や情報の流れの研究を通してこそ、組織が変化する環境に対応する過程の理解を成し遂げることができよう」<sup>97</sup>。情報分野は、インフォーマルな集団にとっても同様、組織にとっても集団中心的なものであり、社会的空間的に近接している情報源を好むように偏向しており、繰り返すが生活世界における知識は完全も一致も必要としない。「実際……一致性と完全性は、時によっては、実行可能な答を見つけるなかで問題を作り出す」<sup>98</sup>。決定は、単純な・標準化された・実用的な規範にそって、つまりシュッツによるレシベのモデルに密接にそって、たいてい行われる。意志決定の社会的偏向は、問題解決の広範な模倣によって影響を受けており、そこでは組織が社会空間においてそれらに近接している「仲間」の戦略を模倣している<sup>99</sup>。最終的には、団体への新入者がどのようにして現実の構築や世界観が社会的に適応するかということに気づく。ある程度これは訓練や入門指導によって形成されるが、おそらくより重要なのは増大していく日常接触の経験である。新入者が組織の自明視された世界に調和するようになり、その状況の定義が彼ら自身のものになるように<sup>100</sup>。



したがって生活世界における社会的行為に関するシュッツ理論から導かれた人間の社会的モデルは、科学的・インフォーマルの・組織的行為の前提や源を構成する経験の素朴な領域を描くにも同等に有用である。これは、社会的環境は必然的に個人的行為を統制するという新たな決定論を主張するのではなく、むしろ一定不変に局所的出発となるであろう生活世界のなかでの基線となる特徴群を明らかにするものである。社会的行為の理論は、空間的事象に先行する社会的認知的文脈を検討する社会地理学にとって的を射る枠組みと基盤を提供するのである。

### 場所の意味

マンハイムの業績の一つは、歴史の相対的本質を明らかにしたことである。これは、全員が正しいとかだれ一人もが正しくないというような相対主義を提示することではなく、むしろすべての歴史的な真実は主体にとっての真実でもあることを強調することである。歴史的事実の実存主義的相対性はその解釈のなかで記憶に止められるべきものである。「歴史は意味の創造的媒介であり単なる受動的媒介ではない。」<sup>96</sup>

時間に対してと同様に、空間に対しても意味がある。それぞれの場所は、その相対的文脈のなかで、主体にとっての客体として、同様に現象学的にみられるべきである。場所について語ることは、客体のみについてではなく、イメージや意図、つまりヴィダリアンの世界感覚に多くみられる景観を語ることなのである<sup>97</sup>。このように場所はつねに意味を持っており、それは主体に「とって」のものであり、この意味は主体の意図に伝えられるだけでなく、仲間や同時代の人々との新しい世代的行動をかりたてる分離した変数として伝えるのである。

しかし場所が主体を伴わない意味のないものであれば、それゆえ同じく自身の場所から連れ去られた人間ははっきりとしないアイデンティティをもった人間となる<sup>98</sup>。こうした単純な弁証法は、例えば遠距離での人口移動の人間の側面を理解することを可能とする。遠隔の離れた都市圏は、経済決定論を伴った重力モデルが私たちを信じさせるような完全な物質的な項目としては決して知覚されない。都市圏は意味を持っており、それは、パークの言葉では、心理状態であり、つねに行為に先行する主体にとっての意味なのである。

創造的な意志決定は、機械的な重力の場によって占有されているわけではない。同様にして、新たに到着した都市移民は、自身が新たな環境と当初は関係が切り離されていることに気づく。つまり、その場所は彼にとっての場所ではないのである<sup>99</sup>。

場所の個性を解明するなかで、フランス学派の解釈的地理学は、(マックス・ウェーバーのような)その強力な経験的直感的な基盤を伴い、主として人間と自然環境との関係に関心を寄せていた。ヴィダルの後継者であるマキシミアン・ソールは都市化の進む時代に生活様式を規定する決定的諸力はますます自然的よりもむしろ社会的なそれとなることを認識していた。メルロー＝ポンティは歴史は他の人々であると述べている。都市の時代に、地理もまた他の人々である。場所は人間間の関係によってますます規定されるようになる。ブリティッシュ・コロンビア州は、社会主義に傾倒した政府が選挙に敗北して以来、トロントの投資会社にとって付加された意味をもっている。メキシコ・シティが、国連においてのイスラエルに対するメキシコの提携以来、ゴールドスタインと呼ばれる潜在的なニューヨークの保養者にとって持っているのと同様である。

現代の都市化においては、場所は多元的な現実を一般に持っている。その意味はその主体の意図によって変化するであろうし、主体の複合性は同時に同じ場所に様々な意味を持たす。しかしながら、ふつうは、卓越した意味が揺れをおさめ、そして景観はそれに埋め込まれている主観的意向の指標として生産物の現象学的感覚のなかで作用する。同様にして、環境における平凡でかつ自明視されている特徴は、それ自体だけでなく局所的な社会的価値をさし示す。例えば、壁のらくがきは、アメリカのインナーシティにおける集団間や集団と空間との間の日常関係を支配するつかみどころのない態度を映す鏡を提示する。それらは、もちろん社会集団間の間接的な伝達形態としてじかの観客と演技者をも有している。多くの景観舞台は、マイクロなデザインの特徴と「ムード」雰囲気創造を通して、その境界内での適切な行動の鍵を提示する<sup>100</sup>。場所の意味は統合的に同じような関心やライフスタイルの集団を引きつける。場所は、知覚されたイメージと知識のストックを基盤とした反応的な意志決定者によって選択され保持される。結果は、都市が、習慣的な相互作用のなかでその集団や場所双方の特色を強める同じ

意図の集団をたがいに支える社会的世界のモザイクとなる、ということである。

こうした場所の個性は、国民国家から近隣の教会にまでスケールは及んでいる。習慣的に相互作用がある人々の集団は、常連にとっては不問となり自明視されているにもかかわらず、よそのものにとってすぐに明らかなかれらが占拠している場所の特色を伝達する。それゆえ場所への新参者は、局地的な世界観に適応させる強力な圧力のもとにあり、経験的にはそのような態度的取束が起こる傾向がある<sup>71</sup>。

生活世界内部では仲間や同時代の人々による社会的明示の空間的対照物がある。われわれの経験における最も単純なレベルで、空間は近い部分と遠い部分へ、私的なものと公的なもののように、分割される。近い場所は、よく知られており、予測可能で、守られ、鑑がおろされており、家に限定されているわけではない。つまり、それは「守られている境界の内部に集中している」<sup>72</sup>。家は自明視されている世界の中核である。官能は住宅計画や、幾何学や、金（ドル）を語る。しかし、家は経験の言葉であり、人々の言葉である。

私的空間が家だけでなくコミュニティへと広がる境遇がある。この広がり、客観的な土地利用や社会経済的特性によってはめつたに決められず、団結やアイデンティティの共有された知覚によって導かれる間主観的な同意を通して決められる<sup>73</sup>。地図上での特徴的な状態は、コミュニティを規定するのに充分ではない。空間的に明確に確認された民族的に均質なブラックインナーシティ近隣の欲求不満を抱く居住者のコメントを考えてみよう。

コミュニティ？ええ、なにがコミュニティなんだ？コミュニティなんかいいよ。自分自身で用心しているだけだよ。・・・だがコミュニティのことを気にするんだい？食事とビール1缶をやれば満足するさ。コミュニティなんか必要ないんだよ。

意味を持ちそれゆえ経験において現実を持つためには、コミュニティは事実と価値の融合物でなければならない。それは、主観の複合性にとつての共通した客体でなければならない。

客体から主体を分けることは、脱工業化の都市圏のアノミーの特質である。非人間化された都市舞台は空間や幾何学を含むにすぎない。それらは関わりをかりたてないし、集合性に「とつて」のものではない。そ

れらは、機能的物質主義を強調する分析様式の景観理解である。計画パラダイムへ移植されるそうした分析は、客観的意味の景観のみで、主体のない形態を創りだす<sup>74</sup>。資本主義の都市も社会主義の都市も人間を忘れた唯物論的哲学の出現を表示している。それに抗して、多くの現代の草の根運動が土地に意味を回復させることを試みている。歴史的建物の保存、近隣の保護、道路や公共工事のための破壊への反対、自然やオープンスペースの保護区域化の主張などである。これらすべては、人間の文脈の自由をはぎとる事象への還元という土地の客体化に対する反抗である。平和時のナショナルリスト・マイノリティや戦争時の全国民のような集団にとって、土地はアイデンティティの代用物である。「もし土地を失えば、私たち自身を失う」<sup>75</sup>。アイデンティティと景観の関係は、根深いものであり、概して未検討にもかかわらず、人間はその場所であるというフランス現象学者のフレーズを信じさせる。場所の意味は、それ自体関係のなかで人間集団の意向から当初は導かれたというような弁証法的側面を呼び戻すとき、この言葉の決定論的な含意は、次第に消えていく。

## 結論

結論にあたり本稿に欠けている点を告白しておきたい。現象学にもとづく社会地理学における一般化の特質・解釈的方法としての理解・社会的行為における状況的諸力としての構造の役割・現象学における存在と実在をめぐる論争、を含む多くの重要な方法論的諸問題について論じていない。これらはここでは無理なかなりのスペースを必要とする事項である<sup>76</sup>。現象学的分析が規範的なものではないこともぜひつけ加えておきたい。それであるとして現実に出会い、それであるべきとして出会うのではない。

本稿の目的は、より慎み深いものである。議論してきたことは、社会地理学の現在のあいまいな状況が、新しい問題ではなく少なくとも 1922 年のパローによる会長講演くらい昔には生じていたということである。そうしたことは、物質的現象や経済諸力、さらに説明において自然科学モデルに、この学問が占有されていることに起因している。引き継いでこの伝統はヴィダル学派・シカゴ派都市社会学・行動地理学を転換させ、主体を無視するかあるいは本質的に主観的である問題

を不適切なア・プリオリな仮説-検証の類型へと追いやってきた。これは空間的事象を乗り越えて社会的過程へと向かい、形態の問題から意味や意図の問題へと先導していく前進にとって有望な道筋ではない。

再定式化の第1歩は、インフォーマルの・科学的・組織的というすべての行為分野において客体と同様に主体が充満する存在を認識するものごとそれ自体のラディカルな記述である。第2は、客体と主体や事実と価値を包含する哲学的基盤を取り入れることである。現象学はこうしたやっかいな二重性に対して日常世界において背負っている統一体を復興させた。まさにこの経験の自明視されている領域こそ常に言及している点である。第3に、生活世界は孤立したのではなく仲間信者の場所であるという認識である。間主観性は、人間の社会的モデルにとっての基盤となる。第4に、場所は、事実と価値の融合物として、地図の客観性と経験の主観性を含む関係の中で見なければならない。社会地理学者にとって、空間的事象への唯物論的な没頭は満足のものではない。ソールの以下の言葉にあるように、「地理学者は、人がもはや住んでいない家の骨組みの収集家ではない。」<sup>77</sup>

社会地理学が空間的事象を掘り下げて社会集団を徹底的に調べていく上で、こうした処方箋は研究者を、行為の土台、素朴に知られている世界へと、つまり「社会科学における『忘れられた人間』、その行為や感情が全体系の底に横たわっているものである社会的世界の行為者へと」<sup>78</sup>、立ち戻させるであろう。

謝辞 本稿の草稿に対する有用なコメントをくれたアン・パッティマー、トーマス・コチ Thomas Koch, メロウィン・サムエルズ Marwyn Samuels に感謝する。

## 注

1. 例えば、Watson, J. W. (1957) *The sociological aspects of geography*, in Taylor, G. (ed.) *Geography in the twentieth century* (London) 463-99; Pahl, R. (1965) *Trends in social geography*, in Chorley, R. and Haggett, P. (eds.) *Frontiers in geographical teaching* (London) 81-100; Buttimer, A. (1968) *Social geography*, in Sills, D. (ed.) *International Encyclopedia of the Social Science* Vol.6 (New York) 134-45; Claval, P. (1973) *Problèmes théoriques en géographie sociale*, *Canadian Geographer* 17, 103-12.
2. Jones, E. (1975) *Readings in social geography* (London)

p.2

3. Pahl (1965) 前掲注 1) p.81
4. Buttimer (1968) 前掲注 1) p.138
5. 小論であり今までのところ探索的ではあるが、地理学に現象学を導入している文献としては、以下のものがある。Ralph, E. (1970) *An inquiry into the relations between phenomenology and geography*, *Canadian Geographer* 14, 193-201; Mercer, D. and Powell, J. (1972) *Phenomenology and other non-positivist approaches in geography* (Melbourne); Buttimer, A. (1974) *Values in geography*, *Association of American Geographers, Commission of College, Geography Resource Paper* 24.
6. Vidal de la Blache, P. (1926) *Principles of human geography* (New York) p.163. [飯塚浩二訳 (1970) 『人文地理学原理 上・下 (改訂版)』岩波書店] 解釈社会学におけるマックス・ウェーバーの個人的創造性と社会的組織化との間の弁証法と比較されたい。Weber, M. (1968) *On charisma and institution buildings: selected papers*, edited by Eisenstadt, S. N. (Chicago)
7. Berdoulay, V. (1975) *'Human geography versus social morphology'*, presented at Canadian Association of Geographers meeting, Vancouver; Buttimer, A. (1971) *Society and milieu in the French geographic tradition*, *Association of American Geographers Monograph Series* 6.
8. この議論の北米での反響は、少しは知られた文献にてでる。Hayes, E. (1908) *Sociology and psychology; sociology and geography*, *American Journal of Sociology* 14, 371-407.
9. Buttimer (1971) 前掲注 7) p.63
10. 前掲注 7) p.103
11. こうした特徴付けの源として、以下の文献を参照されたい。Brookfield, H. (1964) *Questions on the human frontiers of geography*, *Economic Geography* 40, 283-303.
12. 実際、ヴィダルからの場合と同様、パークから一部のみ取り出での引用は、決定論的偏向という誤った印象を与えかねない。例えば、「…気質は受け継がれる一方で、性格や習慣は環境の影響をうけて形成される。」Park, R. (1967) *The city as a social laboratory*, in Turner, R. (ed.) *On social control and collective behavior* (Chicago) 3-18 [町村敬士訳(1986)「社会的実験室としての都市」町村敬士・好井裕明訳『実験室としての都市 パーク社会学論文選』御茶の水書房]
13. Park, R. (1916) *The city: suggestions for the investigation of human behavior in the urban environment*, *American Journal of Sociology* 20, 597-612 [笹森秀雄訳(1965)「都市-都市環境における人間行動研究のための若干の示唆」鈴木広編『都市化の社会学』誠信書房]
14. Park (1967) 前掲注 12) p.5; 都市地域研究の傑出した例としては以下を参照されたい。Zorbaugh, H. (1929) *The gold coast and the slum*. (Chicago)

16. 個性や環境に満ちた研究はシカゴ学派の他のメンバー、とくにトーマズとズナイエツキによってなしとげられた。有用な展覧書である以下を参照されたい。Thomas, W. I. (1966) *On social organization and social personality*, edited and introduced by Janowitz, M. (Chicago); Znaniecki, F. (1969) *On humanistic sociology: selected papers*, edited and introduced by Hierstedt, R. (Chicago)
16. Park, R. 前掲注 13)
17. 例えば、Firey, W. (1945) 'Sentiment and symbolism as ecological variables', *American Sociological Review* 10, 140-8; Jonassen, C. (1949) 'Cultural variables in the ecology of an ethnic group', *American Sociological Review* 14, 32-41
18. Park, R. (1936) 'Human ecology', *American Journal of Sociology* 42, 1-15. [町村敬士訳(1966)「都市生態学」町村敬士・好井裕明訳『実験室としての都市 パーク社会学論文選』御茶の水書房] 実際、パークは彼の社会的ダーウィニズムが絶頂のときでさえ、道徳的秩序の考えを主張していた。こうした限定を設けることは、外部の批評家や彼の弟子によってしばしば見逃されているのであるが。
19. 前掲注 18) しかし、再びパークはこの強い主張をやわらげている。人間の性癖の気まぐれがこの展開をありそうもなくさせるという言及によって。
20. Barrows, H. (1923) 'Geography as human ecology', *Annals of the Association of American Geographers* 13, 1-14, p.13 と pp.7-8 を参照されたい。
21. この時期、地理的決定論は人間生態学のように、経済決定的というよりも自然決定的であり続いていた。ヴィンチャーの「民主主義は例外的に肥沃な土壌によって妨げられている…」という 1932 年における広範な聴衆に対する彼による著しく決定論的な社会地理学の紹介と比較されたい。Visher, S. (1932) 'Social geography', *Social Forces* 10, 351-4
22. Jones, E. (1960) *A social geography of Belfast* (London)
23. Sorre, M. (1957) *Recontres de la géographie et de la sociologie*. (Paris) [松田信訳(1968)『地理学と社会学の接点』大明堂] Buttimer, A. (1969) 'Social space in interdisciplinary perspective', *Geographical Review* 59, 417-26 [加藤政洋訳(1996)「学際的スペースベクティヴからみた社会空間」日本地理学会「空間と社会」研究グループ編『社会-空間研究の地平』大阪市立大学]
24. 例えば、Kirk, W. (1963) 'Problems of geography', *Geography* 48, 357-71; Lowenthal, D. (1961) 'Geography, experience, and imagination', *Annals of the Association of American Geographers* 51, 241-60.
25. Colledge, R., Brown, I. and Williamson, F. (1972) 'Behavioral approaches in geography: an overview', *Australian Geographer* 12, 69-79
26. Harvey, D. (1969) 'Conceptual and measurement problems in the cognitive-behavioral approach to location theory', in Cox, K. and Colledge, R. (eds.) *Behavioral problems in geography*, Northwestern University, *Studies in Geography* 17, 35-67, p.39 [奥村玲子訳(1966)「立地論への認知・行動論的アプローチを適用するさいの概念と測度の問題」専ら通信雑誌『空間と行動論-地理学における行動論の諸問題』地人書房]
27. Harvey, D. (1969) *Explanation in geography* (London) [松本正美訳(1979)『地理学基礎論』古今書院(部分訳) Alonso, W. (1964) *Location and land use* (Cambridge, Massachusetts) [折下功訳(1967)『立地と土地利用』朝倉書店] も参照されたい。立地分析におけるこの影響力のある仕事についての率直な導入のなかで、アロンゾは理論的構造に基づいた人間の経済モデルを手がけた。オルソン Olsson が指摘しているように、アロンゾモデルの論理は、ハーヴェイの最近の社会主義的再定式化においても保持されている。
28. Mackenzie, R. (1931) 'Human ecology', in *Encyclopedia of the Social Science* Vol.5, p.314
29. Park, R. (1967) 'The urban community as a spatial pattern and a moral order', reprinted in Turner (1967) 前掲注 12) 55-68, p.56 参照。地理学の重点が空間科学であるという最大の主張は以下の文献にみられる。Bunge, W. (1966) *Theoretical geography* (Lund). 2つの文献の近似は、以下の文献で明らかにされた。Duncan, O. D., Cuzzort, R. P. and Duncan, B. (1961) *Statistical geography* (Glencoe, Illinois); Timms, D. (1965) 'Quantitative techniques in urban social geography', in Chorley and Haggett, 前掲注 1) 239-65
30. Colledge, R. and Amadeo, D. (1968) 'On laws in geography', *Annals of the Association of American Geographers* 58, 760-74. 以下の文献にある他の社会科学における行動主義に対する批判と比較されたい。Natananson, M. (ed.) (1973) *Phenomenology and the social sciences* (Evanston, Illinois)
31. Harvey (1969) 前掲注 26) p.63
32. Mannheim, K. (1952) *Essays on the sociology of knowledge* (London) p.82
33. Olsson, G. (1974) 'The dialectics of spatial analysis', *Antipode* 6(3) 50-62
34. ここで地理学におけるこの傾向についてのゼリンスキーによる認識と抵抗、あわせて彼が代案を提議できないこと、と比較されたい。Zelinski, W. (1975) 'The demigod's dilemma', *Annals of the Association of American Geographers* 65, 123-43
35. 以下の文献からの引用。Buytendijk, F. (1967) 'Husserl's phenomenology and its significance for contemporary psychology', in Lawrence, N. and O'Connor, D. (eds.) *Readings in existential phenomenology* (Englewood Cliffs, New Jersey), 352-64, p.364 参照
36. こうしたシュツツの業績についての、最近のレビューは、

- 以下の文献にある。Williams, R. (1973) *Les fondements phénoménologiques de la sociologie compréhensive: Alfred Schutz and Max Weber* (The Hague)
37. 以下の文献より引用。Spiegelberg, H. (1969) *The phenomenological movement*, Vol.2 (The Hague) p.551; また Samules, M. (1976) 'Human geography and existential space', Department of Geography, University of British Columbia
38. Schutz, A. (1945) 'On multiple realities', *Philosophy Phenomenological Research* 5, 533-76 [那須壽(1985)「多元的現実について」渡辺光・那須壽・西原和久訳『社会的現実の問題 [II]』マルジュ社]
39. 例えば, Zaner, R. (1970) *The way of phenomenology* (New York)
40. さらなる経験的議論は, Ley, D. (1974) 'The black inner city as frontier outpost: images and behavior of a Philadelphia neighborhood', *Association of American Geographers Monograph Series* 7, 特に第9章を参照されたい。
41. Kerlin, R. (1920) *The voice of the Negro* (New York); Detweiler, F. (1922) *The Negro press in the United States* (Chicago)
42. Rose, A. and Rose, C. (1953) *America divided* (New York)
43. Johnson, R. (1958) 'Negro reactions to minority group status', in Barron, M. (ed.) *American minority* (New York) p.212
44. Williams, R. (1964) *Strangers next door* (Englewood Cliffs, New Jersey) p.280
45. Caplan, N. (1970) 'The new ghetto man', *Journal of Social Issues* 26, 53-73
46. Billingsley, A. (1970) 'Black families and white social science', *Journal of Social Issues* 26, 127-42; そうした「誤った一般化」に関する包括的な議論は、以下の文献を参照されたい。Schutz, A. (1964) 'Concept and theory formation in the social sciences', *Journal of Philosophy* 51, 257-74 [那須壽訳(1983)「社会科学における概念構成と理論構成」渡辺光・那須壽・西原和久訳『アルフレッド・シュッツ著作集 第1巻 社会的現実の問題 [I]』マルジュ社]
47. 1960年代におけるイギリスと合衆国における新しい地理学の空間的社会的拡張は適応が、社会的合意に依拠している他の現象の拡張とかなり類似していることに注目すべきである。Whitehand, J. (1970) 'Innovation diffusion in an academic discipline: the case of the 'new geography'', *Area* 2(3) 19-30; Lavelle, P., McConnell, H. and Brown, R. (1967) 'Certain aspects of the explanation of quantitative methodology in American geography', *Annals of the Association of American Geographers* 57, 423-36
48. 距離変数の強調しすぎからくる潜在的な歪め効果の例としては以下の文献を参照されたい。Smith, C. (1976) 'Distance and the location of community mental health facilities: a divergent viewpoint', *Economic Geography* 52, 181-91
- ゼリンスキーの地理学における科学主義に對する最近の批判(注34)は地理学的読み込みの社会的本質を絶えず強調している。シンボリック相互作用主義に関する文献は、社会規範の組織化の形式はつた展開を提示している。Shubert, T. (1961) *Society and personality* (Englewood Cliffs, New Jersey)
49. Harvey(1969) 前掲注27) p.486
50. Schutz, A. (1960) 'The social world and the theory of social action', *Social Research* 27, 205-21, pp.207-8を見よ; これはシュッツの考えに関する重要な部分の最も簡潔な概観を提示している。他の有用なレビューは, Gurwitsch, A. (1962) 'The commonsense world as social reality', *Social Research* 29, 50-72; 十分な言及は以下の文献を参照されたい。Schutz, A. (1967) *The phenomenology of the social world* (Evanston, Illinois) [佐藤嘉一訳(1982)『社会的世界の意味構成』木澤社]; Schutz, A. (1970) *On phenomenology and social relations*, Wagner, H. (ed.) (Chicago) [森川真規・浜日出男訳(1980)『現象学的方法』紀伊國屋書店]; Schutz, A. and Luckman, T. (1973) *The structure of the life world* (Evanston, Illinois)
51. このよく知られた概念は、シカゴでパークの同僚であったトーマス Thomas によって展開された。ヴィダルやパークの初期の経験的学派にとって基盤となる現象学とシンボリック相互作用主義の状況的哲学の適切さを指摘するものである。以下の文献も参照されたい。Mercoer, D. (1972) 'Behavioral geography and the sociology of social action', *Area* 4, 48-51
52. これはシンボリック相互作用主義の中心的教義である。例えば以下の文献を参照されたい。Blumer, H. (1969) *Symbolic interactionism* (Englewood Cliffs, New Jersey) [後藤得之(1991)『シンボリック相互作用論: パースペクティヴと方法』朝草書房]; 経験的妥当性については、Laumann, E. (1973) *Bonds of pluralism: the form and substance of urban social networks* (New York)
53. Ley, D. and Cybriwsky, R. 'Urban graffiti as territorial markers', *Annals of the Association of American Geographers* 64, 491-505
54. 洗練された議論としては、以下の文献を参照されたい。Berger, P. and Luckman, T. (1966) *The social construction of reality* (New York) [山口節郎訳(1977)『日常世界の構成』新曜社]; 経験的事例としては以下を参照されたい。Ley, D. (1975) 'The street gang in its milieu', in Rose, H. and Gappert, G. (eds.) *The social economy of cities* (Beverly Hills, California.) 247-73
55. Thomas, D. (1960) *Quite early one morning* (New York) p.4
56. 生活世界の類型化の役割に関する十分な議論は以下の文献を参照されたい。Natanson, M. (1974) *Phenomenology, rule, and reason* (Springfield, Illinois)
57. Schutz and Luckman (1973) 前掲注50) 特に, pp.178-9

58. Berger and Luckman (1966) 前掲注 54) p.57
59. Cyert, R. and March, J. (1963) *A behavioral theory of the firm* (Englewood Cliffs, N. J.) [松田武彦監訳・井上恒夫訳 (1967) 『企業の行動理論』ダイヤモンド社]; Hamilton, F. (ed.) (1974) *Spatial perspectives on industrial organization and decision-making* (London) そのデータの主観的性質にも関わらず、著者たちは実証主義の枠の中での行動研究の標準的な手順を順じて追っている。注 30)と比較されたい。
60. 例えば、以下の文献を参照されたい。Hartman, C. (1974) *Yerba Buena: land grab and community resistance in San Francisco* (San Francisco)
61. ウェイナー Weiner とディーク Deak は、例えば、州交通ネットワークを合同で計画しているコネティカット州ハイウェイ局と州計画委員会の非常に異なった世界観を示している。Weiner, P. and Deak, E. (1972) *Environment factors in transportation planning* (Lexington, Massachusetts)
62. Dicken, P. (1971) 'Some aspects of the decision-making behavior of business organization', *Economic Geography* 47, 426-37
63. Cyert and March (1963) 前掲注 59) p.78
64. 例えば、Mercer, J. (1974) 'City manager communities in the Montreal metropolitan community', *Canadian Geographer* 18, 352-66
65. これは公共利害においてする組織監視人の推挙というよく知られたパターンを説明するのに役立つかもしれない。統制されている組織との繰り返しの相互作用は、態度の取束、さらに最終的には世界観の共有を導く。
66. Mannheim (1952) 前掲注 32) p.187
67. 例えば以下の文献を参照されたい。Tuan, Yi-Fu (1971) 'Geography, phenomenology, and the study of human nature', *Canadian Geographer* 15, 181-92
68. シュッツによるよそものの実存主義的ディレンマを参照されたい。Schutz, A. (1944) 'The stranger', *American Journal of Sociology* 49, 499-507 [丘沢静也訳(1977)『よそもの現象学』現代思想 5(2)]
69. 適応問題の古典的研究は、シカゴ学派の初期の刊行物の一つにもある。Thomas, W. and Znaniecki, F. (1927) *The Polish peasant in Europe and America, 2nd edition* (New York) [坂井厚訳(1983)『生活誌の社会学』御茶の水書房(部分訳)]
70. 例えば、Cressey, P. (1932) *The taxi-dance hall* (Chicago); Huggill, P. (1975) 'Social conduct on the golden mile', *Annals of the Association of American Geographers* 65, 214-28
71. 文脈的効果は地理学の文献のなかでも見ることができる。例えば、Robson, B. (1969) *Urban analysis* (Cambridge) シュッツはそれを主観的見地から検討している。Schutz (1944) 前掲注 68)
72. Bachelard, G. (1969) *The poetics of space* (Boston) p. xxxiii; また、Tuan, Yi-Fu (1975) 'Place: an experiential perspective', *Geographical Review* 65, 161-65
73. Clark, D. (1973) 'The concept of community: a re-examination', *Sociological Review* 21, 397-416
74. Sommer, R. (1974) *Tight spaces: hard architecture and how to humanize it* (Englewood Cliffs, New Jersey) [牧野成一・牧野泰子訳(1982)『現代建築の反逆: クイト・スペース』東海大学出版会]
75. カナダでの先住民による土地の権利に関する最近の集会で横断幕に書かれたスローガン。場所は、汚名をきせられるようなアイデンティティをも導く。例えば、誤った人生行路、ある地域的方言の糸口、それからテレビシリーズが私たちに思い出させるように、ヴィクトリア様式の住居における上り階段の反対側の地下室(使用入室)のように。
76. こうした問題は現在用意している2冊の本のなかで詳細にとりあげている。Battimer, A. *Rhythm, routine, and symbol*; Ley, D. and Samuels, M. (eds.) (1978) *Humanistic orientations in geography* [後に、Ley, D. and Samuels, M. (eds.) (1978) *Humanistic geography: prospects and problems* (Chicago) として出版]
77. Sorre (1957) 前掲注 23) p.199
78. Schutz (1960) 前掲注 50) p.207